

第1回里山研究グループ自然観察会（昭和万葉の森管理事務所と共催）

「地質観察会－古代地質から炭窯まで－」

執筆者： 西城 潔・古市剛久

参加者： 21名

2017年11月19日（日）、宮城県大衡村の昭和万葉の森（以下、万葉の森）において昭和万葉の森管理事務所の主催、東北地理学会里山研究グループの共催で、自然観察会「地質観察会－古代地質から炭窯まで－」が開催された。以下、当日の観察会の概要について報告する。

万葉の森は、県有地に1989年に開園した面積約23haの森林公園で、大松沢丘陵西部に位置する（第1図）。1970年代以降、「仙台北部中核工業団地群」の造成が進められた同丘陵にあって、万葉の森は、丘陵地の自然地形や里山景観の景観をとどめる貴重な森林公園といえる。

「地質観察会－古代地質から炭窯まで－」と題して開催した自然観察会であるが、とくに「万葉の森のなり立ちをさぐる－里山に人と自然の歴史をみる－」をテーマに、大松沢丘陵および周辺域の地形地質、過去の里山利用とそれに関わる景観の観察を主なねらいとした。具体的には、園内にみられる新第三系堆積岩類（凝灰岩・円礫層）と七ツ森・船形山火山から推定される鮮新世～更新世の地史と古環境、谷頭部（川の始まり）の地形と河川による丘陵地の地形変化、炭窯跡の存在から推定される過去の炭焼きについて、現地を歩きながら参加者に解説した（第2図）。また万葉の森管理事務所によって復元された「復元炭窯」の見学も行った。

当日、参加者は午前10時に万葉の森管理事務所に集合、挨拶と行程説明の後、上記テーマのもと、園内を散策しながら観察を行った（第3図）。当日は冬型の気圧配置のため、時折雪の舞う空模様となったものの、開催時間である午前10時～12時の間は比較的陽射しにも恵まれ、まずまずの観察会日和となった。

地点1では、「川の始まり」である谷頭部について、地形の特徴を確認しつつ、関連する水や土砂の動き、数千～数万年スケールでの地形発達などについて解説した。同様の谷頭部が万葉の森には8ヶ所で認められる。周辺丘陵地の地形が大規模に改変されている中において、自然地形の谷頭部が複数残されていることは、万葉の森の重要な存在価値のひとつであり、こうした地学的な面での魅力について参加者に強調した。

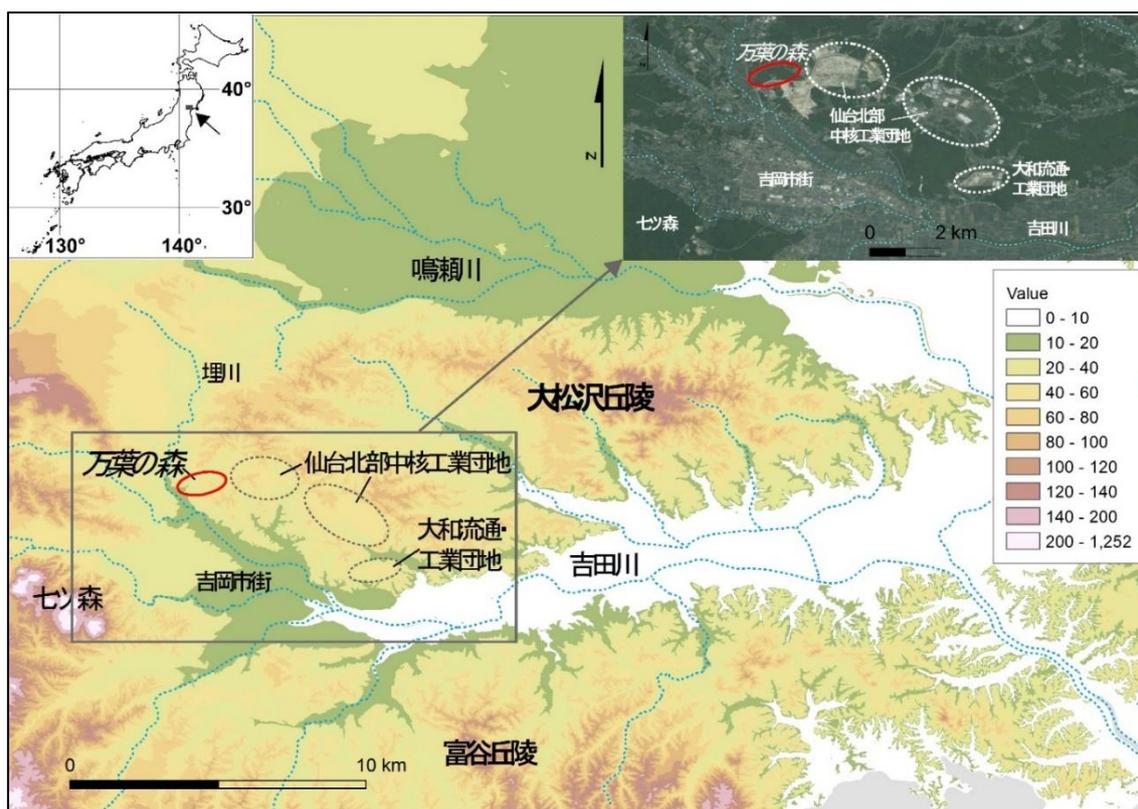
地点2は、西方に船形山・七ツ森の火山群を望む園内の最高点である。ここでは、万葉の森および周辺地域の地史をテーマに、船形・七ツ森火山の活動史、宮床凝灰岩の分布と給源、頂部斜面にみられる円礫層の成因等について解説をした。また次の地点3への移動途上で

は、遊歩道沿いの小露頭において、宮床凝灰岩を観察した。

2017年夏、万葉の森管理事務所によって炭窯が復元された地点3では、里山利用や炭焼きについての一般的説明に続き、復元作業を主導された同事務所の菊地一男氏から、過去の大衡村での炭焼きについて、自身の体験をふまえたお話があった。また参加者からは、窯の造りや特徴、炭の焼き方等について、さまざまな質問や感想が出された。

地点4と5では、過去に使われていた炭窯跡を確認した。炭窯跡は径3-4mほどの楕円形状の窪みとなって残っているが、目立ちにくく見逃されがちである。しかし、こうした炭窯跡は過去の炭焼きとその特徴を示す貴重な地形景観であること、とくに炭窯跡の分布を丘陵の地形条件との関係でとらえると、昔の人が地形を合理的に利用して炭焼きを行っていたことが窺えるといった解説をした。

最後に管理事務所に戻り、参加者に謝意を表しつつ、観察会のまとめを行った。またアンケートに回答いただいた。その内容や、今回のような自然観察会の社会的意義については、会誌「季刊地理学」にて別途報告したい。



第1図 大松沢丘陵と昭和万葉の森



第2図 参加者への説明の様子



第3図 昭和万葉の森自然観察会ルート